

タイヤ式フォワーダ新投入

全木集材でフル活用

赤坂木材



タイヤ式フォワーダのグレモ

素材生産・森林整備事業を手掛ける赤坂木材(北海道北見市、渋谷光敏社長)は、スウェーデン・グレモの最新フォワーダを導入した。長くブルドーザー集材を行ってきたが、オホーツク地方でも燃料用などの低質材需要が拡大しており、従来のブルドーザーによる全木集材からフォワーダを活用し、素材生産作業の効率化を図るとともに省力化にもつなげる。

同社は1997年創設。伐採業で、今から30年前の90年ごろから高性能林業機械の導入を進めてきた。さきごろ、伐採で使用した機械を活用しながら伐採・地直し作業を連携して行う一貫作業も導入している。

年間伐採量は(主伐・間伐)は約4万2000立方メートル。5年前は約3万立方メートルだったが、徐々に引き上げられており、来年は5万立方メートルを目標に据えている。

枝葉やタンク口などの林地残材を集めて販売する。販売先は、石川県のJHS(加賀市)や、福井県のJHS(加賀市)などがある。



渋谷 社長

ブナの製材を見学・意見交換

地元資源どう生かすか

スノーピーチ

新潟県では、民有林のブナ材を活用しようというプロジェクト「スノーピーチ」(世話人 紙谷智彦新潟大学名誉教授)が動き出している。新潟県ではブナの森林資源が多く、熱帯産広葉樹の入荷が限られてきたなかで、国内の広葉樹資源に対して関心が高まり、「豪雪地帯の集材が難しくなっているなかで、中山間地の集材の近くにあるブナを活用して」という動きもある。

「と紙谷名誉教授は話している。

12日に志田材木店 県のNPO法人など、(新潟県長岡市、志田喜弘社長)で開催された「ブナ挽き板見学・報告・意見交換会」に、紙谷名誉教授は「秋は家具メーカー、デザイナー、森林組合関係者、学生のほか、岩手県内、秋の趣旨を説明した。秋伐り丸太は2、3、4材の213本、45立方メートル。末口径は22、34材、最大が56材。県内の合板工場でカツラむきにする試作も実施した。



志田材木店でブナの製材を見学する

地形等条件次第では可能と判断した。導入後、グレモ1台で1日あたり80立方メートル以上の集材による全木集材は、搬出量がある。また、従来は1班6人、3台稼働で1日80立方メートル程度だったが、グレモは3人体制と作業当りの省力化につながっている。グレモはサナース(横浜市)が販売するフォワーダで、赤坂木材が購入したのは1050F4。積載最大量が10・5トで、前輪タイヤがリフトアップして最小回転半径は6センチと小回りが利く。特にクラムバンクシエルというクワガタのハサミのような装備が全木集材を容易にするほか、タイヤ式フォワーダのため移動速度が速い。

石川県企業がJHS出展

能登ヒバ・加賀杉で空間演出

石川県木材産業振興協会(加賀市)は、加賀市木材、中東、中島木材工業(中島市)が出展する「NOHIBAKAR」(ノヒバカール)を総合的に紹介。同社は能登ヒバの持つ防虫・防カビ機能の関心が社会的に高まっていることを受け、天然成分を用いた同ブランドの安全性をアピールした。



石川県地域材の魅力と可能性を発信した

「A」を総合的に紹介。同社は能登ヒバの持つ防虫・防カビ機能の関心が社会的に高まっていることを受け、天然成分を用いた同ブランドの安全性をアピールした。

フルタニランパーは、金沢城修繕で同社が加工・納品した能登ヒバの端材を利用した香り袋「能登の香りHIBA」などを展示。能登ヒバのなかでも力強い鉄釘という希少種をスライスしている。

フルタニランパーは、現在制作中の能登ヒバ利用の楽器を参考展示。北リビング社は能登ヒバを使ったログハウスキットをブース利用した。

このほか、中東は同社の集材材やCLTを用いてブースを演出。ムラモトは天然素材塗りの壁材「Wallio」(ウツワキ)を紹介した。石川県ブースでは、能登ヒバや加賀杉の香りが広がり、リラックス効果が期待されている。

わせ、山林を購入せず、原野でのワイルドキャンプを手軽に楽しんでもらうのが狙い。キャンプ向けに林地を年間レンタルする事業は、国内初と見られる。コロナ禍で密を避けながら余暇を過ごす一環として、アウトドア、特にキャンプへの注目が高まっている。

「審査委員長賞」に同局職員が受賞した。審査委員長賞を受賞した発表課題は「里山広葉樹材需要拡大という今後の課題」という。発表者は同局技術普及課の磯崎愛永氏。今年度は同局の職員に加え、教育機関や研究機関、森林組合など14機関・団体が参加した。

近畿中国森林管理局は10、11の両日、「森林・林業交流研究発表会」をオービックホール(大阪市)で開催した。今年度は同局の職員に加え、教育機関や研究機関、森林組合など14機関・団体が参加した。

置き、販売手法などについて検討した内容を説明した。同職員が柔軟な頭を使って、広葉樹の需要拡大という今後の課題に取り組みたいと述べた。このほかの表彰では、近畿中国森林管理局長賞「スギ・ヒノキコンテナ苗の植栽後の活着率、初期成長と雪害抵抗性」1年生苗と2年生苗の比較(鳥根県中間地域研究センター)鳥根県森林管理署、「3次元点群データを用いた森林管理」(森林技術・支援センター)、「木材市場での高強度スギ丸太の選別販売に向けた取り組み」(丸太強度の簡易な選別方法)「兵庫県立農林水産技術総合センター」森林技術センターなど。

「みえ森林教育ビジョン」を策定。三重県は、これまで取り組んできた森林環境教育や木育を次のステップへ発展させるため、新たに「みえ森林教育ビジョン」を策定した。森林・林業と社会をめぐり、森林環境やビジネスを志すき

育の基本的な考え方、目標とする社会や人物像、取り組みの進め方などを規定している。同ビジョンでは、推進していく森林環境教育や木育の基本的な考え方を「森林や木材が暮らしや経済に当たり前に取り入れられている社会づくり」へ向けた教育「森林に関わる活動やビジネスを志すき

「かけとなる教育」自ら考え、判断して行動できる場や機会の拡大、保育や教育への森林教育のさらなる普及、大人や企業を対象とした森林教育の拡充、子どもから大人まで一貫した教育体系の構築、主体的・対話的で深い学びの充実、森林教育を実践できる指導者の養成などに取り組んでいくとしている。

「かけとなる教育」自ら考え、判断して行動できる場や機会の拡大、保育や教育への森林教育のさらなる普及、大人や企業を対象とした森林教育の拡充、子どもから大人まで一貫した教育体系の構築、主体的・対話的で深い学びの充実、森林教育を実践できる指導者の養成などに取り組んでいくとしている。

「かけとなる教育」自ら考え、判断して行動できる場や機会の拡大、保育や教育への森林教育のさらなる普及、大人や企業を対象とした森林教育の拡充、子どもから大人まで一貫した教育体系の構築、主体的・対話的で深い学びの充実、森林教育を実践できる指導者の養成などに取り組んでいくとしている。

「かけとなる教育」自ら考え、判断して行動できる場や機会の拡大、保育や教育への森林教育のさらなる普及、大人や企業を対象とした森林教育の拡充、子どもから大人まで一貫した教育体系の構築、主体的・対話的で深い学びの充実、森林教育を実践できる指導者の養成などに取り組んでいくとしている。